その偶然は必然の始まり

紅月 時夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その偶然は必然の始まり

【Ｎコード】
Ｎ５９４９Ｏ

【作者名】
紅月　時夢

【あらすじ】
初めて見た瞬間から、もう恋に落ちていた。

――――貴方に囚われた心。

――――お前から離れない心。

気付いたのは、すぐだった。

クラウドとレノの出会い。それは、彼らの新しい未来への一歩。

それは今からずっと昔、彼がまだ一般兵だった頃のお話し。

毎日の訓練に疲れながらも、自主トレを欠かさずに行っていた彼の帰宅時間はいつも遅かった。
寮のため門限はあるものの、その時間は十一時と比較的遅い時間だったために、いつも多くの者たちが夜の時間を楽しんでいる。
そんな仲間たちの隣を通り過ぎ、彼はトレーニング後にシャワーを浴びただけの体を早くゆっくり湯船に浸けたくて、寮へと向かっていた。水に濡れた金髪はビル内の蛍光灯の光を反射してキラキラと輝いている。

彼の名はクラウド・ストライフ。神羅カンパニーに入社して、まだ三ヶ月の新人兵だ。
クラウドは神羅ビルの、ある一つの出入口へと向かう。出れば寮は目前だ。
温かな湯船を思い、口元が緩く弧を描いた。しかし直後、その口元は引き結ばれる。

「あれは確か……タークス？」

ダークスーツに身を包んだ二人の男が、見張りをするように出入口の両隣に立っていた。赤髪に目の下の刺青が特徴的な男と、スキンヘッドにサングラスが特徴的な男。まだ任務らしい任務もなく、タークスと共に任務をすることなどほとんどないために、その二人が誰なのかはわからなかった。しかし、一般兵である自分が敬意を賞するには当たり前の相手だった。

「お疲れ様です」

立ち止まって二人に敬礼をとる。

「おう、ご苦労さん、と」

赤髪のタークスはそう答えた。

「……」

スキンヘッドのタークスは何も言わなかったが、視線を向けて軽く頷いた。

「もしかしてお前、ここ通りたい？」

「は、はい」

急に問われてしどろもどろになりつつも、クラウドは赤髪のタークスにはっきりと言った。

「あー、残念だが、今ここは通行禁止だぞ、と」

「え？」

その言葉に、クラウドは思わず問い返してしまった。

「通行禁止…？」

「あぁ、ちょっとこの外で今ごたついててな。誰も通せないんだぞ、と」

赤髪のタークスは困ったように肩をすくめた。

「寮に行けるの、ここだけだったのに…」

残念そうにクラウドは言って、ふと後ろを見た。

「もしかして、みんながここにいるのも」

「あぁ、外が片付くまで待っててもらってるぞ、と」

赤髪のタークスは大きく伸びをしながら退屈そうに言った。

その言葉を聞いて待っているのは自分だけではないのだとわかり、クラウドは仕方ないとため息を吐き出した。

「お前、風呂上がりか？」

「え？」

振り返ってスキンヘッドのタークスを見た。

「髪が濡れているからな」

「あぁ……これは、シャワー浴びて来たんです」

「シャワー？」

赤髪のタークスがクラウドの言葉に首を傾げた。

「こんな時間まで訓練してた……わけねぇよな」

「自主トレ、してたんです」

「ほぉ、がんばるねぇ」

有りのままを言うと赤髪のタークスに感心されてしまい、クラウドの頬が軽く朱に染まる。そう言われて悪い気はしない。

そのままクラウドは、タークスの二人と話をしていた。

その最中に聞いた彼らの名は、赤髪のタークスがレノ、スキンヘッドのタークスがルードというらしい。

どれだけの時間話していたのかはわからないが、かなりの時間そう

して話してしただろう。
話が盛り上がっていたその時、扉の向こうが呼応するかのように騒がしくなった。

「何だ？」

レノとルードが扉へと向き直り、訝しげに見やる。クラウドも二人の後ろから扉を見た。

「！」

突然扉が吹き飛び、爆風がビル内へと侵入した。

「っ！何なんだ？！ツォンさんとシスネはどうした！」

レノが爆風の中、仲間の名を叫ぶ。第二波が起こり、先ほど飛ばされた扉が再び飛ばされる。向かって来た扉に気付いたルードは紙一重でかわし、扉は粉塵の中背後へと向かった。

「ぅあっ！！」

しかし、背後から聞こえてきた苦痛の叫び。レノとルードは粉塵の中ハッと顔を合わせて背後を見た。
少しずつ治まっていく粉塵。開け放たれた出入口から入ってくる風の影響か、視界が開けるまでそう長くはかからなかった。

「クラウドっ！」

床に倒れ伏しているクラウドを見てレノは走り寄った。
ルードは一度扉のなくなった出入口を見るも、誰かが来そうな気配

はないためレノに続き、クラウドのもとへと走る。

「おい、しっかりしろ！」

レノが抱き起こすと、うめき声を上げるクラウド。目を開く様子はない。

「あの扉が当たったのか」

ルードが苦々しげに言いながら、頭の怪我を見る。額に当たったのか、深く切れていた。多くの血が流れ、すでに床に血溜りが出来ている。

レノはもしもの時のために持っていた布をポケットから引っ張りだし、止血を始めた。

「ルード、他の奴らは？」

止血を終え、その体勢のまま周りを見回すと、他に怪我人がいないか確認する。

大量の粉塵に室内は汚れ、埃っぽいものの、特にこれと言って怪我をしている者はいないようだ。爆風に吹き飛ばされかけた者はいるようだが。

「大丈夫そうだな」

「あぁ」

ルードの言葉に頷くと、レノは再び腕の中にいるクラウドへと視線を戻した。

痛むに呻いているクラウドの傷からは血が止まらない。止血をして少しはましになったが、あまり変わってはいなかった。

「このままだとちょっとヤバいな。かと言って、ツォンさんたちの方もわかんねぇし…」

他の一般兵に頼むという手もあるが、下手をすると先程の爆風に紛れて中へ敵が侵入してしまっている可能性だって捨てきれない。今、怪我をしているクラウドを自分たちから離すというのは危険な行為だった。

「治療が必要って言っても、回復のマテリアは持ってないし…」

かと言って放っておいて心配のない傷などでは決してない。周りを見ても一般兵がほとんどで、マテリアを持っている可能性は皆無に等しかった。

「レノ」

「……」

「レノ！」

「！何だ？いきなり大声出して、ビックリするぞ、と」

「……俺はずっと呼んでいた」

ルードに反抗するレノだが、返ってきた返答に言葉を詰まらせた。心なしか、ルードの視線が冷たいような気もする。

レノはいたたまれなかった。

「レノ、クラウドを連れていけ」

「は？お前、何言って…」

「このままだとマズイ。俺はここに残る。ツォンさんには言っておくから問題ない」

「……サンキュー、相棒」

「任せておけ」

レノは一度、ルードと拳を合わせた。そしてクラウドの傷に触らないよう両腕で抱え上げ、ビルの奥へと迎う。

医務室を目指して、レノは走った。

「軽い脳震盪です。脳への異常も見られません」

医者にそう言われ、クラウドに付き添ってどれほどの時が過ぎただろう。ベッドで眠るクラウドの頭には包帯が巻かれ、枕元には水が置いてある。

レノは椅子に座り、クラウドの手を握っていた。なぜそうしているのかと聞かれれば答えることは出来ない。しかし、なぜか今はこうしていたかった。こうして、クラウドの隣でいたかった。

「俺は…」

自分の中に芽生えつつある感情にレノは驚いていた。だが、不思議とその感情に対して嫌悪感はわかない。むしろ、その感情は募るばかりで。

「なぁ、クラウド。俺がお前を護りたいって思うのは、変か？」

握っている手とは逆の手でクラウドの頬にそっと触れる。まるで壊れ物を扱うかのように、優しく。

初めて彼を見た時から抱いていた感情を今になって知るなど滑稽だ。伝えたいという思いと、嫌われたくないという思いが胸の中で責めぎあう。

「我ながら女々しいぞ、と」

ため息と同時に言葉を吐き出した。

目の前で寝ている少年はとても小柄だ。決してガタイがいいわけではない。先ほど彼を抱えて走った時に思ったことだったが、とても軽かった。それは驚くほどに。

「兵士……か」

己はタークスで、彼は兵士。どちらも死と隣り合わせの職業だ。今回は大したことがなかったからいいものの、次もそうだとは限らない。

「次が必ずしもあるとは限らないのが、ここでの暮らしだな」

クラウドはまだそれほど危険な任務につくことはないだろう。それに恐らく、彼が本格的に任務につくようになる頃には今起きているウータイの戦争も終結しているはずだ。近々ソルジャーが投入されることになっている。

「確かｌｓｔ二人と、その一人のお墨付きの２ｎｄだったか」

英雄が出撃するはずだったな。

ちらほらと考えながらも、レノの視線がクラウドから動くことはなかった。

部屋が少しずつ明るくなってきた頃、彼は目を覚ました。

「ここは…」

真っ白な天井、消毒液の臭い。
覚えのあるその場所に記憶がよみがえる。

「医務室……そうか、あの時何かがぶつかって」

レノさんたちに迷惑かけたかも…。
ため息を吐くクラウドは、左手に温もりがあることに気付いた。
誰かに、握られてる？
視線を向けると、そこには

「レノ、さん…？」

しっかりと手を握り、ベッドに上半身をもたれさせた状態で眠っている。
クラウドの乾いた喉からは擦れた小さな音しか出なかった。
ずっと付いていてくれたのだろう。それを思うと胸が温かくなる。
そっとレノの手を握り返す。
温かくすっぽりと自分の手を包み込む彼の手は大きく安心感があった。見ることの出来る寝顔は得した気分で嬉しく思う。
そして、それとは別に湧き上がる思い。

「レノさん、俺…」

気付いてしまった思いは止められず、涙となって現れる。唇を噛みしめて、クラウドは声を必死にこらえた。それでも涙は止まらずに零れ落ち、真っ白なシーツに染みを作る。

「っく…」

今だけでもこの温もりを感じていたくて、手を握る手に力を込める。時間が経っても、彼の涙は止まらずにいた。外では太陽が完全に姿を現わしていた。その時不意に、手が強く握られた。

「クラウド、どうした？傷が痛むのか？」

ハッと視線を向けると、今起きたのだろうレノが心配そうに見つめている。気遣う視線は本物で、クラウドはその気遣いに自分が情けなくて恥ずかしくて、また涙を零した。

「違います…」

頭を振ると弱冠の痛みは走るものの、そんなことは今のクラウドにとってはどうでもいいことだった。

「自分が、情けなくて」

怪我を負った経緯のことを言っているのだろうとレノは解釈する。

「仕方ないさ。昨日はアレは不意討ちもいいとこだ。俺とルードの注意不足だったんだぞ、と」

だが、その言葉に対してまたもクラウドは首を横に振った。

「違う、違うんです」

「？」

「こんな感情、抱いたらいけないのに…。こんな感情、持ったらダ

メなのに…」
「感情？」

「こんな……レノさんのこと好きだなんて、思っちゃいけないのにっ！！」

半ば叫ぶように想いを吐露すると、クラウドは両手で顔を覆った。
肩を震わせ泣くその様は、見ていると胸が痛む。
レノは呆気にとられるも、ハッと我に帰るとクラウドへ手を伸ばした。

「？」

引っ張られる体に、突然の温もり。クラウドは何が起きているのかわからなかった。

「クラウド」
「え、レノ…さん？どうして」
「レノだ」
「え？」
「レノで、いいぞ、と」
「でも…」
「レノだ。クラウド」

耳元でそう強く言われてしまっては反抗出来ない。クラウドは恐る恐る名を呼んだ。

「れ……レノ？」

そう呼ぶと、レノは口元を綻ばせた。
クラウドを少し離すと、その優しい微笑みを浮かべたままこう言った。

「俺も好きだぜ、クラウド」

そう言って、触れるだけのキスを唇へ落とした。
直後、クラウドが茹でダコのように顔を真っ赤にして卒倒したのは言うまでもない事実だ。

――――覚悟しろよ？

――――もう絶対、離してなんかやらないからな…

end

（後書き）

クラウドとレノの出会い捏造設定。

神羅時代に会っていたらいいじゃない！

という妄想の産物。

事件に巻き込ませたのは、距離が縮まりそうと思ったから←

ずっとイチャイチャしててたらいいんだ（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5949o/

その偶然は必然の始まり

2010年10月30日19時44分発行